
黒い穴の出口に

すじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い穴の出口に

【Nコード】

N5775G

【作者名】

すじ

【あらすじ】

私は神と鎖で繋がれた。だけど私はこんな鎖断ち切ってしまったくて……いつかどこか分からない世界を私は走り続ける。

私は、目の前の男に苦笑を返して。小さく手を振った。

「バイバイ」

次の瞬間、私の姿は男の目から見えなくなった。

ああ、もつたいたいことしたな。私はそう思う。少なくとも、出会った男は優しく、頼れた。彼の告白どおり、一緒にいたって何の抵抗もない。私が普通の人間だったなら、私はあの申し出を受け入れていた。私もあの男が好きだったのだから。

私は、男の目の前から消えて、闇の中をかけていた。

この闇のことを、人はブラックホールと呼び、この黒き穴は欲望のまま何もかも吸い込むと認識している。この穴は宇宙に存在し、もちろん人間なら入れはしない。入れたとしても、出れるわけがない。

でも、私はそこにいる。私は人間であって、人間ではない。だから、ここにいます。

私の元いた世界では、時々私のような人間が存在した。私のような、時と空間を駆ける人間。

この能力は、神から授けられた、私を呪縛する鎖だ。

「私の世界の、300年後の世界へ」

私が何も動かさず呟くと、穴の出口が広がる。この真っ黒の空間は、男の世界での認識が出口のない迷宮であっても。私の世界では、ここは出入り口のある特別な扉だ。

ブラックホールは、世界全てを飲み込む。時間も、光も、星も。

だから、穴の中に入れば、その全てを見ることが出来る。飲み込んで

だもの全てを、見る事が。

神と鎖に繋がれた私たちのような人間には、見える。

私の世界は、ほとんど水に囲まれている。陸地は本当に微量で、人が住むには狭すぎた。だから私の世界では、人は空に住んでいた。「300年もすれば、すべて変わる……」

私がよく知っている時間より300年も後の今は、人は水上に住んでいた。ぶかぶかと浮かぶ都市に、私は立っていた。

街の入り組んだ場所のようで、人気はない。静かに、建物の隙間風が吹く。

ここなら誰にも見つからずに生きられるだろうか。追われることなく、生きられるだろうか？

「私の町は、もう、ないのかもしれない」

300年もすれば、何もかも変わるのだろう。空に浮いていたはずの空中都市は、数を減らしている。私の町も、消えている可能性だってなくもない。

少しだけ深呼吸をした私は歩き出した。まずは、人のいそうな中心街へ向かう。そして、隠れる場所を探して、ひっそりと生きる。

整った道に、きれいな風。こういったところは昔から変わらない。

自然と笑みが漏れて その笑みは消えた。

「ようやく、見つけたぞ」

ああ。何処へ行っても。どれだけ時間を隔てても。神の鎖は、解けないのか。

「私は、帰る気などない」

私は足を止め、声の方向を見た。死神のように、黒き布をまとった時の番人。

私の世界では、時を駆けることが出来る者には特別な義務があった。神と創造主の命令通り、時間を駆け、戦い、他の世界を滅ぼし、取り込むために。

そのために私たちは鎖に紡がれる。

「私は、誰の指図も受けない」

「そう貴様が望んでいても、それは叶わない望みだ」

私は目をつむった。

この世界からも、逃げなくてはならない。私の世界であるはずなのに。ここにいる権利は、私にないというのか。

「私は全てを知ることができる」

「その力は神から授かったものだ」

「授かりたくて、授かったわけではない」

私は自分の胸に手をやる。

「勝手に、神が私に与えた力だ。私が好きに使って何が悪い」

そうだ。私は、誰の指図も受けない。戦うなんて、嫌だ。滅びる世界を自分の力で作るのは、嫌だ。

「神に逆らうのか」

「現に逆らっている。あの時間には、もう戻らない」

鎖は振り切れない。そんなことは知っている。

それでも、自由を知ってしまった私はもう昔の束縛へは戻れない。

「私のようなモノに力を与えた神が悪い」

「なんと無礼な！」

「私は全てを知ることが出来る。だから」

だから、私は全てを見るために生きる。神や創造主のためになんか、生きてたまるものか。

「さよなら」

私は相手がかかってくる前に、姿を消した。

追われる身になって幾年たったのだらう。神を裏切ったものとして、追われてどれほど時間がたったのだらう。あらゆる時間と世界を駆け巡った私には、それすら分からない。

たった1時間か。それとも何百年も生きながらえたのか。

「わかるわけではない」

私はブラックホールと呼ばれる黒き穴にいた。後ろから時の番人が迫ってくるのを、感じる。

私は逃げようと、次の行き先を決めた。

「238年前の、どこか私の世界に似た世界へ」

適当な過去にむかって、私は見えた出口へむかって。走った。走った。

広がった出口から飛び出しても私はまだ走った。どこかも分からない森の中を走っていた。私の世界に似ていて、まったく似ていない世界を。私の世界の森は、こんなに大きくない。

そして、走って気づいた。この世界は、崩壊が迫っている。

森の外から聞こえる悲鳴。空を染める真紅の炎と鈍色の煙。

このような戦いの世界。幾度となく見てきた。知ってきた。

私の世界が関係していたものも、していなかったものも。様々なものをみてきた。そして、人が死ぬのを、森が枯れるのを、空が泣くのをみた。

私はそれらを見て思う。神に従って、このような世界と時間を作るのは嫌だ、と。全てを知ることが出来る身だというのに。戦いしか知れないのは、苦痛だ。

「この世界の、100年後へ」

そう呟いて。黒き闇が私を一気に包み込んで、出口へ押しやった。光が見えて、私はこの世界の100年前と同じ場所に立っていると感じた。木は大きく成長し、空は青く澄んでいた。戦いは、終わっていた。

悲鳴も聞こえず、炎も煙も見えない。すべて、終わっているようだった。

「どうせこうなるのなら。どうして、人は戦うの」

平和な時間へ戻るのなら。平和な時間を望むのなら。どうして人は戦わずにはいられないのか。

私は微笑した。どうでもいい。100年後には、こうなるのだから

ら。きっと何かしら100年前の戦いで見出して、こうなったのだろ。戦いにも、意味はあるはずだ。

そうでなければ。人そのものが意味のないものになってしまう。

「この世界には、いつまでいられるのだろうか」

私はあるきだした。背を伸ばして、まっすぐ前を向いて。

いつまでも追われてたつていい。それでも、私はすべてを知りたい。すべてを知ることが出来るのだから。まだ知らないことを、知りたい。

と、森が終わった所に、一人の男がいた。

「君は」

ああ、おかしい。この世界は。

あの男の世界だ。

「さっきは、どこへ行ってしまったんだい」

「……遠い所へ行ってきたの」

ああ、おもしろい。こんな、時間の定まっていない私にも。運命というものは、定まっているのだろうか？

「ああ、返事がまだだったのね……」

「そうだよ。なあ、僕と一緒に」

くすりと笑った。男の顔は真っ赤だ。

「よろこんで」

喜んでついでいく。

何度貴方と離れなくてはならなくても。私はこの世界で生きよう。どれほど追われることになっても。なんと逃げることになっても。

私は必ずこの世界へ、この時間へ帰ってこよう。
いくら時間がかかっても。

(後書き)

少し昔に思いついた設定を思い出して書いてみた。

ブラックホールがいろんな世界につながっていけばいいのになあ、
という私の妄想。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5775g/>

黒い穴の出口に

2010年10月8日15時14分発行